

<辛口時評>

21世紀と「3つの大量死」

近所の丘に登って、21世紀の初日の出を待った。いつもは私ひとりの「日の出の丘」だったが、この日はさすがに30人ほどが集まって新世紀の日の出を待っていた。強風が吹き荒れ、陽が昇るあたりに黒雲がたなびいていて、多難な21世紀の夜明けを象徴するかのようだった。定刻より13分遅れて太陽が顔を出すと、いっせいに拍手が起こった。すると、後ろの方の若いグループから「森首相のもとで21世紀は迎えたくなかったなア。元気が出ないよ」というざわめきが聞こえてきた。確かに、7割の国民が支持していない首相のもとで、新世紀を迎えることになったのは日本国民の不幸である。1つの「困難」と言えるかもしれない。早くも年初から円安・株安の「日本売り」が始まっている。大型スキャンダルも続く。新世紀早々日本はどこへ行くのか。

人類の歴史に強烈な光と影を刻みつけて、激動と波乱の20世紀が歴史の彼方に去っていった。「戦争と革命の世紀」と呼ばれる20世紀だが、私はむしろ「人類滅亡の可能性を人間自身が創(つくり)出した世紀」として特徴づけたい。核兵器や地球環境問題はその象徴である。つまり、人間活動の総体が地球の容量を超えはじめ、人間社会の成長の限界、開発の限界がはっきり見えるようになり、人類の持続可能性に赤ランプが灯(とも)った世紀だった。したがって21世紀の最大の課題は、人類の持続可能性のために、人間活動の総体に対して量と質の両面から、グローバルな市民的制御を課していくことではないか。

かつて長洲一二氏(前知事、故人)は、まだ横浜国大教授だった28年前の論文で、早くも人類の直面する「3つの大量死」(トリプル・マス・デス)について警告していた。

「第1は核(近代兵器)による人類の急激な大量死。第2は、環境破壊による緩慢な大量死。そして第3は、管理社会による人格と精神の大量死。現代人は、空前の繁栄の外見の下で、この3つの大量死に向かって歩いているのかもしれない」(長洲一二「人間賛歌」)

米ソ冷戦の終結によって、人類共滅の全面核戦争の危険は薄らいだが、いまだ核兵器は廃絶されておらず、核実験は続いており、限定的な核兵器の使用、原発事故などの危険はいぜん存在している。

地球環境問題も一段と深刻化し、有史いらい初めて人間活動による生物多様性の破壊や気候変動が進んでいる。その結果、急激かつ大規模な海面上昇なども起こり得る。核戦争に代わって、地球環境破壊が人類の急激な大量死をもたらす可能性が出てきている。

「人格と精神の大量死」も、教育の荒廃、青少年犯罪や自殺者の急増、精神・神経疾患の広がり

などを見ると、社会的症状は一段と重くなっている。

スイスのシンクタンク・国際経営開発研究所による競争力の国際比較のデータによれば、日本は1986年から93年までは常に1位を占めていたが、94年から転落が始まり、2000年には47カ国中17位となっている。財政運営、政治システムなどでは46、44位と最低に近いランクである。

外国のシンクタンクの診断を待つまでもなく、世紀末の10年、日本の国力、影響力、存在感が大きく低下したことは明らかだ。昨年、韓国の留学生から「日本にあこがれて留学したが、魅力が感じられなくなったので、アメリカに留学先を変更したい」との相談を受けた。私は「日本経済の挫折(ざせつ)もまた教訓になるはずだ」と慰留したが、彼の失望は経済だけではなかった。「南北首脳会談直後の国会で、朝鮮半島の新事態を受け日本の役割について真剣な論議があるものと期待したが、なかった。日本政治は内向きで志も低い」と落胆を隠さなかった。昨年暮れ、彼はカナダ経由でアメリカに飛び立っていった。

日本が存在感と魅力を取り戻し、留学生たちの心をつなぎ留めるためにも、政治、経済、社会の構造改革を徹底し、競争力の回復と日本モデルの再構築を図るべきだ。さらに3つの大量死に象徴される人類的課題についても、国運を賭(と)す気概で国民の創造力を結集して打開策に挑戦し、「持続可能な世界」へのヴィジョンを内外に問い、率先して取り組むことによって国際貢献を果たし、国際社会の信頼を築き直していく以外にない。今こそリーダーシップの変革の秋(とき)だ。